

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：34443

研究種目：基盤研究 C

研究期間：平成 21 年度～平成 23 年度

課題番号：21500723

研究課題名（和文） 徳島県上勝町における高齢者の生きがいを支える健康と経済基盤

研究課題名（英文） Health and Economic Status Contributing to Subjective Well-being (Ikigai) in the Elderly Living in Kamikatsu Town, Tokushima Prefecture

研究代表者

山口 静枝 (YAMAGUCHI SHIZUE)

大阪青山大学・健康科学部健康栄養学科・教授

研究者番号：20123531

研究成果の概要（和文）：現在の高齢化率が49%である徳島県上勝町に在住する65歳以上の高齢者を対象として、生きがい感に関連する種々の要因を分析した。分析対象者（176名）の平均年齢は75.4±6.9歳。年に数回程度の頻度も含めた有償労働従事率は59.7%であった。生きがい感を従属変数としたロジスティック解析で、「神さまを信じる」「喜ばれることがある」「孤独感が少ない」「貯蓄高が多い」の4因子が生きがい感を有意に高める要因であった。本調査では、長年の経験を生かした仕事を継続できる環境があることは、生きがいをもちながら自立した生活の構築につながることを示唆された。

研究成果の概要（英文）：We explored factors relating to subjective well-being (Ikigai) in 176 residents aged 65years and over in Kamikatsu Town (aged rate 49%),Tokushima Prefecture. The average age of the subjects was 75.4±6.9 years, and 59.7% of the subjects were engaged in paid labor. Logistic analysis revealed that independent factors for Ikigai were belief in god, receiving thanks from others, low solitary feeling, and high savings. Circumstances for continuing life-long jobs may contribute to subjective well-being in the elderly.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学一般

キーワード：高齢者、生きがい感、心身健康、経済基盤、ロジスティック解析

1. 研究開始当初の背景

我が国は、短期間に急激な高齢社会を迎えた。そして今後も高齢化率は上昇の一途をたどり、2050年の老年人口は38.9%と予測されている。このような状況の中、高齢者が安心して生活するための施策や自立して暮らすための社会環境づくりが求められるが、理想的なモデルが見出されているとはいえない。

また同時に、このような社会においては、高齢者自身が元気に生き生きと暮らそうとすることが社会ならびに個人にとって重要なことである。活力ある日本社会を目指すために、多数を占める高齢者が生きがいを持って暮らす社会環境を構築することは重要であると考えた。

2. 研究の目的

サクセスフル・エイジングや高齢期の QOL に関する多くの先行研究がなされているが、一致した報告はそれほど多くはない。生きがい感や何をもって生きがいとするかは、個人によって異なる。そこで、超高齢社会を先取りしている上に、元気で働く高齢者が多い徳島県上勝町を調査対象地域に設定し、当該地域で暮らす高齢者へのインタビューやアンケート調査を通して、高齢期を幸せに暮らすための生活指標を心身両面から考察するとともに、今後の日本社会の進む方向性を模索する手がかりをえることを目的とした。また、高齢期においては、心身の健康状態の個人差が大きいため、高齢者をひとくくりでは言及できない。本研究では、地域在住で自立した生活を営む元気な高齢者を対象とした。

3. 研究の方法

1) 調査対象地域の特徴

上勝町の主な産業は、林業と農業であるが、町が主体となって5つの会社を設立運営している。この第三セクターのひとつである「株式会社いろどり（以下「いろどり」と略す）」が注目され、国内はもとより海外からも多くの視察者が訪れている。「いろどり」における高齢者の仕事内容は、料理に添えるつまモノの生産と出荷が主なものである。運営は株式会社いろどりであり、従事している農家は個人事業主という形態をとっている。

また、2011年3月31日現在の総人口は1,904人。65歳以上人口は946人で、高齢化率は49.7%である。このように高い高齢化率ではあるが、いろどりインターンシップをはじめとする種々の企画や町おこし事業によって過疎化地域から脱却し、若者のアイターンやユーターンが多いことも特筆すべきことである。

2) 調査方法と時期

インタビューをはじめとする予備調査からはじめ、本調査は、平成23年6月から実施した。アンケート調査は、面接調査法によった。

3) 調査項目

①身体計測

握力、加速度脈波測定

②アンケート調査項目

主観的健康感、主観的幸福感、生きがい感を尺度(11段階)として取り上げた。人口学的要因として「性」「年齢」「家族構成」、生活習慣・身体的要因として「睡眠時間」「身体活動」「喫煙」「飲酒」「朝食」「間食」「塩分摂取」「咀嚼能力」「食品摂取多様性得点」「身体の痛みの有無」「慢性疾患の有無」「老研式活動能力指標」、経済要因として「貯蓄額」、活動性・社会参加要因には「親しい友人の数」「喜ばれることの有無」「夢

中になることの有無」「神さまや宗教信仰の有無」「公的サービス」、productive activities は、「有償労働」「いろどり従事」「無償労働」「同居世話」「別居世話」「近隣支援」「ボランティア活動」とした。

4) 分析方法

項目ごとの群間の検定は、Mann-Whitney の U-test, さらに、生きがい感を従属変数としたロジスティック解析を行った。分析には、IBM-SPSS for windows Ver19 を用いた。

4. 研究成果

1) アンケート調査結果

①対象者の属性

分析対象者176名の平均年齢は75.4±6.9歳、性別は男性29%、女性71%であった。家族構成は、夫婦のみの世帯45.5%、単独世帯22.2%であった。

②身体状況

高齢者のQOLには、身体の痛みの有無や咀嚼能力が関与すると報告されている。これらに関連する項目を表1に示す。

表1 身体状況

		%
慢性疾患	ある	63.1
	ない	36.9
通院	通院なし	38.6
	通院有	61.4
身体の痛み	ある	68.8
	肩	15.9
	腰	38.1
	ひざ	35.2
	手足	25.0
	その他	4.0
咀嚼力	噛めないものが多い	6.3
	軟らかいものなら噛める	10.8
	ふつうに噛める	83.0
歯の状態	総入れ歯	28.4
	抜けた歯はそのまま	15.9
	差し歯・部分入れ歯	42.6
	全て自分の歯	13.1
公的サービス	受けている	19.3
	受けていない	80.7

何らかの疾患があり、通院をしている割合は約60%。体に痛みがあると答えたのは68.8%。歯の状態では、総入れ歯が28.4%あったものの、普通に噛めるとしたのが83%あり、咀嚼能力はほぼ良好なようである。さらに、デイサービスなどの公的サービスを受けているのは19.3%。第1号被保険者に占める要介護(要支援)認定者の割合を調べると(平成21年資料)、大阪市20.8%、徳島県20.7%、上勝町25.2%であった。高齢化率の高い上勝町はやや高い割合になっているが、実際上勝町で調査を通して高齢者の方々と出会ってみると、このように高い認定率には合点がいかないようにも思われる。認定はされていても、公的サービスを受けていないのが実情のように思われる。「忙しくて、デイサービスに行っている時間はありません」とは、「いんどり」に従事している何人もの高齢者の方から聞いた言葉である。

③生活習慣

体を動かす習慣がある(88%)、毎日朝食を摂取する(98.3%)、たばこを吸わない(89.2%)、飲酒を全くしない(42.6%)、塩分を摂りすぎないようにしている(62.5%)、7~8時間の睡眠時間(63.6%)であった。

④生活活動能力

WHOは、高齢期の健康指標として生活機能の自立を提唱した(1984)。生活機能として、基本的日常生活活動能力が挙げられるが、これだけではなく、手段的日常生活活動能力がある。Lawtonが提唱する7段階の階層モデルがあるが、柴田らが開発した老研式活動能力指標の評価を行った。結果を表2に示す。

表2 老研式活動能力指標

項目	%
バスや電車で一人で外出できる	84.1
日用品の買い物ができる	95.5
食事の支度ができる	91.5
請求書の支払ができる	97.7
預金の出し入れができる	93.8
年金などの書類が書ける	87.5
新聞を読む	83.0
本や雑誌を読む	74.4
健康情報に関心をもつ	89.8
友人の家を訪問する	76.1
友人の相談にのる	85.2
病人を見舞うことができる	94.3

13 若項目が話しになる老研式能力指標は、すべて

「できる」と13点と得点化し評価できる。本調査対象者の平均得点は11.4±2.1点であった。一方、古谷野らの研究による全国代表サンプル(65歳以上)における老研式活動能力の平均得点は10.8±3.0点であった。本調査対象者の活動能力指標得点は高値であるといえよう。

⑤家族、友人、近隣との関係

日本においては、家族や親族に関する研究が多く、友人や近隣を対象とした研究は少ないと指摘されている。Antonucciは、親族によるサポートよりも友人によるサポートの方が高齢者の幸福感に強く関連すると報告している。精神的状況や人間関係に関連すると考えられる項目について表3にまとめた。

表3 精神的幸福感と関連する項目

	%	
孤独感	ある	21.6
	どちらかというところある	23.9
	どちらかというところない	25.0
	まったくない	29.5
親しい友人、親せき	たくさんいる	51.1
	何人かはいる	43.2
	一人はいる	4.0
	特にいない	1.7
喜ばれること	とてもよくある	28.4
	少しはある	59.1
	あまりない	9.7
	ほとんどない	2.8
夢中になること	とてもある	27.3
	少しある	44.9
	あまりない	20.5
	ほとんどない	7.4
やらないといけないこと	すぐする	31.3
	どちらかというところすぐする	21.6
	どちらかというところ先延ばしする	40.9
	先延ばしする	6.3
神様、宗教	信じていない	46.0
	信じている	54.0

ほとんどの人が、親しい友人や親せきがいると回答しているが、孤独感に関しては、「ある」と「ない」はほぼ同じ割合であった。「喜ばれること」や「夢中になること」がとてもある割合は、それぞれ28.4%、27.3%あり、何らかの宗教を信じているのは54%であった。

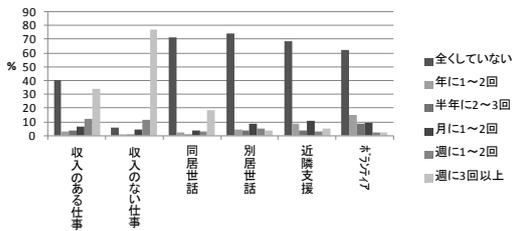
⑥productive activities

高齢者白書(平成23年版)によると、我が国の高齢者の就労意欲は男女ともに諸外国に比べて非常に高い。「いつまで働きたいか」という問いに対して、「働けるうちはいつまでも」という回答が39.9%であった。

今回の調査では、高齢者の社会活動を6領

域に設定し、それぞれの活動頻度を質問した。ボランティア活動には、神社の行事や祭り、地区の作業なども含めた。図1に実施状況を示す。

図1 productive activitiesの実施状況

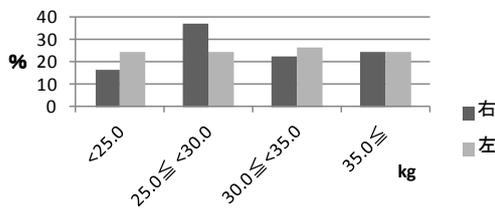


調査対象者の中で、有償労働従事者は59.7%、週に3日以上就労については34.1%であった。1週間当たりの就労日数では7日(18.8%)、5日(15.3%)。1日あたりの就労時間では5時間(13.6%)、8時間(12.5%)の割合が高く、10時間(2.8%)も含まれていた。有償労働をしている人に、仕事をする主な理由を聞いたところ、「収入を得る」(19.9%)が最も多く、「ずっと仕事をしていたい」(9.7%)、「仕事がおもしろい」(6.8%)、「だれかの役に立ちたい」(5.1%)などさまざまな理由が背景にあった。一方、同居世話、別居世話、近隣支援、ボランティアは、全くしていない割合は高かった。

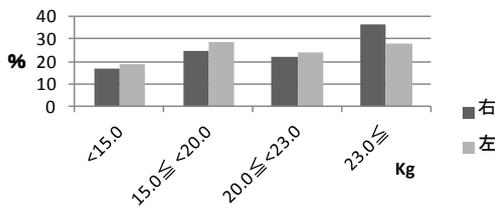
⑦握力、加速度脈波

文科省体力運動能力調査結果と比較すると、標準以上の握力の者は、男性24%、女性36%であった。また血管の動脈硬化度を加速度脈波測定システムで測定した数値をみると、男性33.3%、女性21.2%に動脈硬化が進行していると推定できる者が含まれていた。降圧剤を服用している高齢者が多かったことから、これらの疾患との関連がうかがえる。

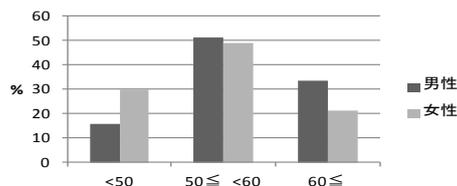
握力(男性)



握力(女性)



加速度脈波



⑧経済要因

毎月の生活費の主な収入源を質問した。有償労働率が高かったにもかかわらず、「就業による所得」と回答したのは27.3%、「年金」によるのは61.4%であった。また、貯蓄高では、「1,000万円以上」が26.7%であった。

⑨尺度

0~10点の11段階の数直線で示した尺度で、生きがい感(0:生きがいを全く感じない, 10:生きがいを非常に感じる)、幸福感(0:非常に不幸, 10:非常に幸福)、健康感(0:非常に不健康, 10:非常に健康)について質問した。それぞれの平均と標準偏差は、生きがい感6.6±2.0、幸福感6.2±2.1、健康感5.6±2.1であった。

2)生きがい感に及ぼす要因分析

①群別平均値の比較

性および年齢区分(75歳未満, 75歳以上)による生きがい感の差は認められなかった。また、有償労働あり群となし群でも有意差はなかった。しかし、有償労働群を「いづれに従事群」と「非従事群」間で生きがい感の尺度を比較するといづれ群が有意に高値を示した(p<0.05)。

②ロジスティック解析

生きがい尺度に従属変数としたロジスティック解析(変数減少法尤度比)結果を示す。

項目	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp(B)	EXP(B)の95%信頼区間	
							下限	上限
喜ばれることがある	1.171	.427	7.527	1	.006	3.227	1.397	7.451
孤独感がない	1.025	.361	8.081	1	.004	2.787	1.375	5.651
神様を信じる	1.548	.378	16.739	1	.000	4.704	2.240	9.877
貯蓄額が多い	.969	.378	6.574	1	.010	2.635	1.256	5.526

有意な関連を示した項目は、「神様を信じる」「喜ばれることがある」「孤独感がない」「貯蓄額が高い」の4項目であった。

3)今後の展望

本調査地域の特色として、高齢者が長年の経験を生かした農業を料理のツマモノ栽培に特化し、生産から出荷までを各自の裁量で経営するいづれ農家があげられる。また同時に、いづれ以外の農作物の生産に従事する有償労働率が高い。先祖から受け継ぐ土地を耕し、自然とともに暮らしながらも、新しい情報を得ることができる環境づくりがう

まく機能している好例と言えよう.

高齢期の幸福はどのような状態にあるのか. 長年, 活動理論と離脱理論が論議されている. 本研究結果からは, 生涯現役型の生活, 生きがい感にもつながることが示唆された. しかし, これは本調査地域の特徴が関与していることも推察されるので, 今後, 地域を変えても, このような関連がみられるのかを検討する必要があると思われる.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 静枝 (YAMAGUCHI SHIZUE)
大阪青山大学・健康科学部・教授
研究者番号: 20123531

(2) 研究分担者

池田 新介 (IKEDA SHINSUKE)
大阪大学・経済研究所・教授
研究者番号: 70184424

(3) 連携研究者

河野 武平 (KOUNO BUHEI)
(株) 精膳
研究者番号: 40641585